



— 私が出会った青春（四） —

目次

ページ

- ・ ⑰ テレビで出会ったベトナムの悲劇・・・・・・・・・・ 2
- ・ ⑱ 「死」と向き合い、「詩」と向き合う、医師S君・・・・ 5
- ・ ⑲ 医学生がぶつかる様々な「壁」
 - （A）誤魔化しを超えて・・・・・・・・・・ 7
 - （B）国境を超えて・・・・・・・・・・ 8
 - （C）友人二人の死を超えて・・・・・・・・・・ 9
 - （D）受験を超えて — 星野富弘さんとの出会い —・・・・ 13
- ・ ^{ひとみ}⑳ 日土水君の「靴屋」の哲学・・・・・・・・・・ 15
- ・ ㉑ 「刀剣修業」の道に入ったM君・・・・・・・・・・ 18
- ・ 予備校 graffiti ・ ⑰～㉑ ・ 余録・・・・・・・・・・ 20
- ・ 予備校 graffiti ・ もう一つの「青春」 ④・・・・・・・・・・ 22

予備校 graffiti ⑰

テレビで出会ったベトナムの悲劇

★E君の人生を決めたのは、偶然テレビで目にした一つの光景でした。ベトナム戦争で、戦禍に遭った子が泣き叫んでいる。E君がこの光景を目にした時、戦争が終わってから既に長い時間が経っていたはずですが。しかし胸を抉られた彼は思ったのです——こんな悲惨な光景が、この地上において再びあってはならない。たとえ過去のこと、遠い国のことだとしても、この無垢な幼な子の涙を見なかったことにしたら、自分の人生は偽りのものとなるだろう。

★E君は自分の夢・使命への準備に二十代全てを費やします。入学した大学で、まず彼がぶつかっただのが語学の壁でした。ここでの授業は基本的に英語で行われるため、達者な英語を話す帰国子女たちを前にして、受験英語の得意だったE君も大きな挫折感を味わいます。発奮した彼は、大学の留学制度を利用してイギリスで学び、英語の力と自信をつけると共に、自分の夢と使命への具体的な視野もはっきりと自覚をするに至ります——世界に満ちる子供の受難をなくすため、自分が取り組むべきことは「教育」に他ならない。世界を変えるために、最も遠回りに見えて最も確実な道とは、この世界から読み書きの出来ない子を一人でも減らすこと、^{イ・リテラシー}il・literacyの問題との対決だ！ この自覚と決意は今に至るまで些かもぶれず、彼を貫いています。

★その後E君は、或る国立大学の大学院で博士課程を修了した後、^{ジャイカ}JICA（独立行政法人国際協力機構）に入り、バングラデシュとインドネシアでの長い教育支援活動の後、一度現場での活動を整理して新たな飛躍に備えるため、シンガポール大学で教鞭をとり研究生活に入りました。ここで彼は結婚をして sweet home を築くのですが、奥さんは、彼の人生を決定づけたあの戦争をアメリカと戦った国、ベトナムからの留学生です。不思議な、しかし強い必然を感じさせる縁です。現在二人はオーストラリアに居を移し、夫婦共々教育と研究に没頭しています。既にE君の海外での実践と研究生活も二十年以上、この間に彼が書き上げた英語論文は世界中の様々な研究誌に掲載され、恐らく質量共に日本のどの大学の教授にも引けを取らないでしょう。

★E君について語るべきことは多いのですが、今回は幼な子の受難の問題以外にもう一つ、E君について私がしばしば若い人たちに語ることがあり、それを記しておこうと思います。日本に一時帰国をした時のことです。彼は私に熱く語ってくれました。

「海外にいと、どうしても日本と日本人のプラスとマイナスについて考える機会が多くなり、どちらかと言うとマイナスの方が多いのが悲しいです。しかし僕が日本について唯一、常に胸を張って誇り得ることがあるとすれば、それは日本が戦争を永久に放棄した憲法第九条を持っていることです。日本がどんなに豊かで優れた技術を持とうとも、またどんなに素晴らしい自然と伝統を誇ろうとも、この事実以上に素晴らしい財産はないと思います。日本が過去に犯した大変な過ちを踏まえ、この平和憲法を持つに至ったのである以上、そして我々がそれを堅く保持し続ける限り、海外の人たちは日本を信頼してくれます。このことを僕は肌身で実感してきました」

ハッとさせられる言葉でした。二十年以上日本を遠く離れ、ひたすら日本と世界の平和と運命について考え続けてきたE君にして初めて可能な認識です。私は若者たちに、将来君たちが海外に出る時、日本国のパスポートの携帯を忘れることがまずないと同様、このE君の言葉をしっかりと心に刻んでゆくよう言い聞かせています。

★私たちの交流は彼の浪人時代からのものですが、三年ほど前から二人の接点が新たに一つ増えました。ライフワークとする教育の問題で、E君がドストエフスキを取り上げつつあるのです。この地上に満ちる罪なくして涙する幼な子——これは彼の人生の出発点となった問題であり、彼が参加したドストエフスキ研究会でも常に問題となり続けてきました。その後E君は、海外でil・literacyの克服の問題と取り組み続けてきた末に、改めて『カラマーゾフの兄弟』に登場する青年スメルジャコフこそ、「罪なくして涙する幼な子」の極たる存在であり、自分が取り組む問題の多くは、このスメルジャコフの生と死の内に含まれていると思うに至ったと言うのです。スメルジャコフについては、私自身も『カラマーゾフの兄弟』のブラック・ホールとして長い間考え、論じてきました。二人は一年に一度でも、研究会を持つことに決めました。先日も一時帰国をした彼と私とは、この問題を論じ合ったのですが、最後に彼はこう宣言して帰ってゆきました——「僕は先生のドストエフスキ大学・カラマーゾフ学部・スメルジャコフ学科の学生です。このテーマで十年は勉強をさせて下さい！」

★E君はメルボルンにある大学への行き帰り、地下鉄の車中でよくカラマーゾフを読むようです。そこで生まれる疑問は、インターネットで送られてきます。これが我々の普段のゼミの場ですが、彼が触れる英文のドストエフスキ研究は、スメルジャコフについて未だ十分な分析をし切れていないため、検討すべき問題は少なくありません。このような「学生」が、新しい活きたドストエフスキ世代として育ち、ドストエフスキを介した新しい日本と世界の未来を創り上げていってくれるのでしょうか。

(この項 了)

予備校 graffiti ⑱

－「死」と向き合い、「詩」と向き合う、医師のS君－

★医学部を卒業し、研修を終えたS君が所属したのは、大学病院の救急外来科でした。何年ぶりに会った時のことです。以前の優しいS君との再会を予想していた私は、待ち合わせた郊外の駅の夜の闇から、革ジャンを着て鋭い眼光で現れた彼の姿に息を呑まされました。以前とは見違えるように鋭利で逞しくなったその姿は、病院で日々体を張って働く彼を雄弁に物語るものでした。その後S君と会った時にも、話がこれからという時に、突然 ON CALL のベルが鳴り、駆け足で病院に戻ってゆく彼の姿は力強く、胸を打つものでした。

★S君は浪人時代から文学や思想関係の本に親しみ、大学時代にはドストエフスキイ研究会に参加を続け、自らの挿絵を付した詩集も自費出版するなど、将来は優しいユニークな医師になることを予想させました。事実彼は、その後も専門の仕事の傍ら、詩集を更に二冊出版するなど、その感性の豊かさは変わらず、否、むしろ一層研ぎ澄まされたと言うべきでしょう。そのS君が医師となって大きく変貌を遂げた理由を、彼が救急外来を専門としたこと以外にも、ここで改めて考えてみたいのですが、そのためにも最初に、S君が紡ぎ出す言葉の世界を見ておきたいと思います。彼の処女詩集の中にある詩で、私の最も好きな詩を以下に紹介します。

傷ついた野花のように

ぼくらは夕が訪れると
野に立ち
詫びなければならない
傷ついた野花のように。

むなもとはつめたく
てあしがさめざめとこごえても
てを胸におしいだいて
すべてに詫びなければならない。

ぼくらがまた朝がきたとき
あたらしい命をもらうために。

あたらしくめざめ

そしてあたらしく涙を流すために。

だからぼくたちは夕が訪れると

野にたち

すべてに詫びなければならない

傷ついた野花のように

『風のめざめに』 1999

「すべてに詫びなければならない」—— 出版から既に二十年が経っていますが、今も私には、ここにS君が歩んできた道と、これから歩むであろう道、その思索と生の核となるものが見事に言い表されているように思われます。これがS君の心の原風景であり、彼が愛読するドストエフスキイ世界の正に核となる問題でもある —— S君の変貌は、救急医療の仕事の進展と共に、このドストエフスキイ的「原風景」が、彼の内でより鮮明なものとなっていたことが原因ではないかと私は思っています。

★冒頭に戻ります。S君が久しぶりに私に会いに来たのは、彼が感じている喫緊の課題について話をするためでした。救急外来の医師として彼が直面したのは、幼い子供たちが、いとも簡単に、次々この世から奪い去られてゆく現実でした。この現実を前にして、彼は大きな問いに捕らえられたのです。死とは何なのか？ 人間はなぜ生きるのか？ そもそも人間とは、世界とは何なのか？ これらの事を正面から考えることのないまま、自分はこのまま医師としての仕事を続けていってよいのか？ —— 医師として人間として、これらの根本的な問いの前に立たされたS君は、一時休職をし、改めて文系の大学に入り直し、ゆっくりと考える時間を持ちたいと言うのです。「死」と向き合い、「詩」と向き合う生。私に反対する理由は何もありませんでした。

★その後S君が選んだ道は、救急外来での仕事をアルバイト扱いにしてもらい、ここで最低限の生活費と学費を稼ぎ、或る大学の文学部に入り直し、思想・文学・詩を学ぶという道でした。その後彼は、大学での勉強を終えるとアメリカに渡り、大学院で医学の勉強と思索を続け、帰国後は以前と同じく救急外来の仕事の続けながら、新たに大学院に進んで「詩学」を専攻するに至っています。

★救急病棟で次々と幼くして命を落とす子供たち —— S君はこの子たちを前にして、「死」について改めて本気で考え、新たに「詩」と向き合わねばと思い立ったのでした。今回冒頭に紹介したE君の場合もまた、戦禍に遭った幼な子が苦しむ姿とその涙を偶然テレビで目にしたことが、彼を二十年以上にわたる海外生活へと駆り立てたの

でした。更に前回、音楽に関わる人たちを紹介した中で、ピアノ調律師のS君もまた、家庭内で罪もない子供が次々と親の暴力の犠牲となってゆく現実に、この世界の根底に響く不協和音を聴き取ったのでした。彼ら三人は皆、この世界で日々大人の犠牲となって死んでゆく幼な子たちの苦しみに、目と心を釘付けにさせられたのです。（この後で紹介する ⑭・(C) のYさんの場合も、似た状況にあると言えるでしょう）

★注目すべきは、三人の意識が図らずも向かったのが、彼らの愛読する『カラマーゾフの兄弟』だったことです。ここに登場するカラマーゾフ家の次男イワンこそ、この世界で「罪なくして涙する幼な子」たちを凝視し、そこから神を激しく弾劾し否定する叛逆の思想青年です。この作品は、イワンの激しい怒りと悲しみを縦糸として、人間と世界と歴史の究極が「善」であるのか否か、「神」は存在するのか否か、キリストの愛は究極有効なのか否か、そして死を超えた「永遠の生命」はあるのか否かを問う作品なのです。

★そしてこの『カラマーゾフの兄弟』において、イワンとは対照的に、人間の苦しみや悲しみに寄り添い、その苦しみや悲しみが究極は浄化され癒され、遂には「喜び」に変えられることを説く聖者、その喜びの源泉としての神とキリストの愛を説く存在がゾシマ長老です。この信と愛の人ゾシマ長老は、「人間の一人一人が愛によって全世界を獲得し、世界の罪を自身の涙で洗い浄めることが可能となる」ための唯一絶対の条件とは、「一人一人が地上のあらゆる人たち、全ての人間に対して罪を負っていることを自覚することだ」とするのです。恐らくはこれが『カラマーゾフの兄弟』の、そしてドストエフスキイの最深奥にある思想だと考えてよいでしょう。

だからぼくたちは夕が訪れると

野にたち

すべてに詫びなければならない

傷ついた野花のように

二十年前このように謳ったS君が、その後救急病棟で罪なき幼な子たちの苦しみと死に向き合い、更には医師としての仕事と共に続ける大学院での「詩学」の研究の中から、如何なる思いに至り、如何なる言葉を紡ぐに至るのか、私は緊張感を以って彼の歩みを見つめています。そして改めて『カラマーゾフの兄弟』の世界について、イワンについて、またゾシマ長老について、彼と話し合う時が来ることを待っています。その時にもまた ON CALL の電話が鳴るのかもしれませんが。しかしそのことで我々の対話が途絶えることはあり得ないでしょう。

（この項 了）

★予備校 graffiti ⑱

医学生がぶつかる様々な「壁」

★私は長い間河合塾で医学系のクラスを担当し、今も麹町校で国立系の医学進学コースを担当しています。人間の命に直接最も近いところで仕事をするのが医師ですが、医学部を志望する生徒さんたちの中には、家庭や出身高校やそれらを包む時代そのものの影響で、偏差値重視の勉強に追われ、人間と世界と歴史が抱える問題について殆ど考えることもせずに、二十歳近くまで来てしまった人たちが少なくありません。そして残念ながら、この偏差値重視の価値観の延長線上で、専ら社会的名声や金銭的報酬に心が向かってしまうことも少なくないのです。

私の両親はそれぞれが相次いで思い病に罹り、或る大学病院で延べ十年、十人近くの先生方に診て頂きました。しかしこれら全期間を通じて、私が親の命を預けてよかったと思える先生とは、二人しか出会えませんでした。病んだ肉体の奥にある魂、ここにまで目を向ける医師は少ないのだと感じざるを得ませんでした。

しかしその一方で、今も懐かしさと感謝の心と共に思い出される先生が二人いて下さったことは事実であり、私が予備校で出会う医師志望の生徒さんたちの中にも、もし自分が重篤な病に犯されてしまったら、命を預けてもいいなと感じる若者、伸びやかで明るい心を持った若者も決して少なくはありません。今回は、上に紹介したS君に加えて、医学の道に進んだ生徒さんたちの中でも、皆さんに様々な考えるテーマを提供してくれると思われる人たちを五人ほど紹介したいと思います。スペースが許せば更に多くの人たちも紹介したいのですが、今回は「壁」というテーマを共通項にして、これら五人の医学生がぶつかった問題を記したいと思います。

(A) 誤魔化しを超えて

★Gさんは或る私立大学の経済学部を卒業後、数年の社会生活を経て河合塾に入りました。最前列に座り、真剣で鋭い目が注意を引く女生徒さんでした。「この子は本気だな!」。しかし英語の実践力の素晴らしさとは逆に、英文読解と数学の二教科は力不足で、模試の結果は芳しくなく、長いこと憂鬱な日々が続きました。

★ところが驚いたことにGさんは、私が語学学習の基本的要素として、まず「名詞的要素」と「形容詞的要素」と「副詞的要素」を、「三つのカッコ」として徹底的に自覚させることに強い関心を抱き、ここから改めて英語学習を組み立て直し、更にはもう一つの苦手科目である数学の習得にも突破口を開いてしまったのです。

★大学への再受験には、年齢による頭脳の衰えという壁があるとよく言われます。しかし20代の後半、実は人間の頭脳の働きは深まっていて、私はその壁は必ずしも決定的な障害ではないと思っています。Gさんは「三つのカッコ」の原理的な重要性を理解することで、それまで自分が誤魔化してきた勉強法の一切を清算させることに至ったのです。英語に続き数学の学習においても、まずこの分野で基本的な原理とは何かを徹底的に洗い出し、その基礎的演習を繰り返すことで壁の突破を計ったのでした。頭脳の働きは20代、確実に深まっていたのです。

★この姿勢を支えたのは、Gさんの過去の「誤魔化し」への厳しい反省でした。

「先生、私の出た大学は世間的には一応名門とされ、その名前だけで社会は或る程度誤魔化せます。出身閥も強いのです。だからでしょう。ここでは多くの学生がろくに勉強もせずに遊びまくり、私も勉強をしませんでした。でも社会へ出てからハッとしました。この延長線上で生活を続けていったら、私は人生そのものを誤魔化し続けて終わることになると」

★「誤魔化し」の自覚と、基本原理への立ち帰り —— この二つに立脚し、質問を待つ間にお母さんが握ってくれたおむすびを頬張りながら、また秋以降は焦りとプレッシャーで涙を流しながら、Gさんは一年間の受験生活を一気に駆け抜け、それまでの「誤魔化し」を清算したのです。Gさんのその後の消息は聞きません。しかし彼女はきっと、患者さんに誤魔化しなく自らの「病」と向き合うことを迫る厳しい、しかし真の意味での優しい医師になっているに違いありません。

(この項 了)

(B) 国境を越えて

★F君は某私立大学の商学部を卒業後、社会に出ました。ところがたまたま旅行に出かけたアフリカで、余りにも多くの子供たちが貧困と病気と戦乱に苦しまされ、そしていとも容易にこの世から取り去られてゆく光景を目の当たりにし、自分は今まで何と能天気な生活を送っていたのかと愕然とさせられ、自分の人生をこの子たちのために役立たせたいと、医学部を志望するに至ったのでした。

★Gさんと同じく、F君も文系出身でした。彼も医学部への受験準備に当たって、最初の頃は理系科目に苦しまされ続けました。これも「年齢の壁」と言われるものかもしれません。しかしF君の場合も、モチベーションの高さと、年齢に比例した思索力の深化と、理系の先生方の的確な方向づけと、本人の努力という要素が上手

く重なり合うことで、この「壁」は見事に打ち破られました。次第しだいに力が着いていった二学期のことです。N君は或る時、私に言いました。

「先生、僕は物理と化学がこんなに面白い科目とは知りませんでした！もし高校の先生方がもう少し興味深い授業をしていてくれたならば・・・などと思う時もあります。しかし僕自身が能天気な阿保高校生だったことを棚に上げて、こんな仮定法を使っているようでは駄目ですよ。今を頑張ります！」
 「先生、最近僕は物理学科とか数学科に行くのもいいなと思い始めています。けれどもこの二つの分野には、医学部志望の人たちよりももっと優秀な学生たちが来るそうなので、無理だろうな」

私は答えに窮しました。「君の好きにしてください」。こう言うしかありませんでした。彼の内には「火」がついて、そこから次々と生命力・好奇心が燃え上がって来るのが手に取るように分りました。年齢の壁ばかりか、文系・理系の壁も、また高校時代までの不勉強も、決定的な障害ではないのです。

彼はドストエフスキイにも強い関心を示し始めました。英語の質問が終わると、『罪と罰』や『カラマーゾフの兄弟』が何を扱った作品なのか、そこに病人や苦しむ子供たちや医師が登場するのか等々、様々な質問をしてくるのです。(勿論、登場します)。しかし私は、今はこの世界までは手を出さぬよう強く押し留め、その代わりに将来、ドストエフスキイを愛読する医師となってくれるよう頼んだのでした。

★F君の新たな出発は三十代半ばを過ぎてからのことで、もうその年齢になっているはずです。希望通り「国境なき医師団」に加わり、アフリカで子供たちのために湧き上がる生命力と好奇心、そして強い使命感を以って働いてくれているに違いありません。Gさんと同じく、その後彼からの連絡はありません。しかし私は気にしていません。予備校とは「通過点」に過ぎません。この「通過点」を、F君もGさんも見事に駆け抜けてくれたのです。その間に私たちの信頼関係も確かに築かれた以上、その後の音信不通を気にする必要がどこにあるでしょう。

(この項 了)

(C) 友人二人の死を超えて

★数年前、授業の後で、一瞬私をたじろがせる質問を投げてきたのがYさんでした。

「先生は、人間が死んだ後の「永遠の生命」があると思われませんか？」

「神はあるか」「不死は存在するか」—— これら二つの問いを核として展開するのがドストエフスキイ世界です（この問題は最後の「余録」でも改めて記します）。私は授業の場でドストエフスキイについて話題とすることはあっても、これら二つの問いにまで立ち入って言及することは、まずありません。ところがYさんは、私がドストエフスキイを学び、死を超えた「永遠の生命」をテーマとしていることを語った数少ないクラスの生徒さんだったのです。そして或る時、この問いを私にぶつけてきたのです。

★私の目を正面から見据えて質問をするYさんに、答えをはぐらかすことは出来ません。私は答えました。

「あると思います」

私の前にいるYさんは、医学部を目指して猛勉強中の浪人生です。たとえこの問題・対話が如何に重要なものであろうとも、F君の場合と同様、この時私は、この問題についてこれ以上語ることは控えました。Yさんも、そこで立ち止まりました。

★新たな対話が始まったのは、二年後のことでした。医学部入学を果たしてから更に一年が経ち、二年次の医学生となったYさんが、後輩と一緒に予備校を訪ねてくれたのです。私はYさんから、この問いを発するに至った経緯を改めて教えて頂くことになりました。以下にそれを記させて頂こうと思います。ご本人からも、皆さんの参考になるのであればと、了承を頂いています。ここにあるのは人間の生と死について、若いYさんの心の内に如何なる思いと問いが生じたかについての、実に平明かつ素直な述懐です。きっと皆さんも、同様の体験や思いをしたことを思い出されるに違いありません。

★Yさんが初めて「人の死」を実感したのは、小学校1年生の時でした。同級生の男の子A君が川で溺死してしまったのです。

「同じ歳の同じ学校に通う子が、こんなにもあっけなく、この世からいなくなってしまうものなのか!？」

衝撃の中で翌日、皆で黙祷を捧げた時、Yさんは「何を祈ればよいのか」分からず、ただ茫然としていたそうです。

★Yさんが進学したのは、中高一貫のミッション・スクールでした。ここでは聖書を読むことが日課とされていました。「人は各々使命を持って生まれ、生きている」—— こう教えられるにつけ、Yさんの心に浮かんできたのは次のような問いでした。

「A君の人生にも何か意味があったのだろうか？」

「A君が担っていた使命とは何だったのだろうか？」

このような問いと共に、Yさんは考えたのでした。

「A君の人生には、まだまだこれから様々な歩みがあっただろう。

そのA君の人生について、生き残った自分たちが勝手に意味付けをしたり、

天国にいるのだと都合よく解釈をしたりするのは、おかしいのではないか？」

「人は死んだらおしまい、後は何もないのではないか？」

★解けない様々な問題を抱えたまま浪人生活に入ったYさんは、たまたまドストエフスキイについて、そして死を超えた「永遠の生命」について語った私に、先のような質問をぶつけたのです。私が返した「あると思います」という答えは、Yさんにとって「前代未聞のもの」だったそうです。しかし浪人生活という制約の中で、ドストエフスキイの世界に興味を惹かれつつも、また私の答えに驚かされつつも、Yさんは更に詳しいことは受験が終わった後で、と心に決めたのでした。

★話はそれから後、もう一段、複雑で悲劇的なものとなります。

大学合格の直後、Yさんが知らされたのは、幼馴染のBさんが自死していたという事実でした。Bさんも、Yさんと同じく、医学部を目指していました。ところが様々な問題から、彼女は人生を断念してしまったのです。周囲の人たちの配慮で、この事実は受験の終了まで、Yさんに隠しておかれたのでした。

幼馴染の自死。Yさんは一層真剣に以前の問いに向かうことになります。

「死を超えた永遠の生命とは何だろう？」

「そもそもそれは存在するのだろうか？」

★毎年私は、最後の授業の際に、若者が二十代に是非読んで欲しい本を数十冊、「推薦図書」として紹介するのですが、それらも含めてYさんは、様々な本と取り組んだのでした。私が推薦する本の中には『カラマーゾフの兄弟』もあり、亡き二人の友人たちと向き合う彼女は、この作品に焦点を絞り、その核となるテーマ、死を超えた「永遠の生命」について考え続けたのでした・・・

このような流れの中で、浪人時代から二年後、Yさんは再び予備校を訪れ、死を超えた「永遠の生命」について、私に改めて問いかけることになったのです。

★日本国内とは言え、東京からは離れた土地の国立大学で医学を学ぶYさんは、オーストラリアに暮らすS君と同じく、私との対話の手段はパソコンでのメール交換が主なものです。私自身、ライフワークだった『カラマーゾフの兄弟論』を書き上げてからは、重いテーマの論考にせよエッセイにせよ、全て自分が所属する河合文化教育研究所のHPに、「ドストエフスキイ研究会便り」として掲載して貰っています（この「予備校 graffiti」も、その中の一コーナーです）。ドストエフスキイ研究会の旧来のメンバーとの対話も、パソコンでのメール交換を大いに利用しています。これらの方法が、新しい時代の新しい意思伝達的手段として、また新しい「教育」の手段として、何処まで有効であるのか試みているのです。

★Yさんとのメールによる「質疑応答」の一つを、『カラマーゾフの兄弟』理解の一助として、プライバシーとは関係のない範囲で、紹介させて頂こうと思います。

『カラマーゾフの兄弟』と向き合い、死を超えた「永遠の生命」について考えてはいるものの、そしてこの作品から時に涙が溢れ出るほどの感動を与えられることがあるものの、なかなか肝心のところに焦点が合い切らないというYさんに対して、この春私はアドバイスをしました——この膨大な作品全体を一度に相手にすることは、暫く中断してみることに。そして取り敢えずは、「場違いな会合」と題された第二篇第3章だけに焦点を絞ってみること。と言うのもこの第3章（「信仰心の篤い農夫たち」）では、子供を亡くした母親に対し、ゾシマ長老が語り聞かせる慰めの言葉が紹介され、正にここに死を超えた「永遠の生命」に関する、ドストエフスキイの思想の核心が述べられていること。この第3章を繰り返し読むことで、この問題に関するYさんの思索は相当進むと思われること、等々。

Yさんとの対話は、これからもこのような形で続いてゆくのでしょうか。S君が「ドストエフスキイ大学・カラマーゾフ学部・スメルジャコフ学科」の学生であるとすれば、Yさんは、さしずめ「ドストエフスキイ大学・カラマーゾフ学部・永遠の生命学科」の生徒さんということになるのでしょうか。

★余りにも早く、余りにも突然、この世を去ってしまった二人の友人について、やがてYさんがどのような思索を展開し、どのような「鎮魂歌」を捧げることになるのか。同時に医師としてのYさんが、これから如何に様々な病や死と向き合うことになるのか——その長い旅はまだ始まったばかりです。私も元気でいて、E君やS君やYさんを始めとして、ここに紹介した、そして紹介する若者たちのその後の成長について、更に詳しく報告の出来る日がくることを願っています。（この項 了）

(D) 受験を超えて — 星野富弘さんとの出会い —

★最近の春のことです。或る国立大学の医学部に揃って合格したM君とN君が、麹町校舎に私を訪ねてくれました。二人は合格の報告をすると共に、合格の原因の一つが、私が紹介した星野富弘さんの詩画だったことを知らせに来てくれたのです。「問題的中」という言葉がありますが、長い経験の中でも、これは珍しい合格報告でした。

★二人によると、医学部の二次試験の面接の際に、星野富弘さんの詩画が渡され、それを基に話が進められたというのです。予備校で星野さんの世界に親しんでいた彼らは共に、「アッ！」と思ったそうです。

★私は授業の際に、補助教材としてプリントを一枚ずつ配布するのですが、一学期にはそのプリント右上に出来る小さな余白を利用して、星野富弘さんの詩画を一つずつ紹介することにしています（二学期にはフェルメールの絵画です）。これは或る生徒さんの「提案」によるものです（「先生、プリントに短い詩か写真でも載せてくれれば、俺、授業中に眠らないで済むだろうにな！」）。私はニヤツとして、この腕白坊やの提案を受け容れました。その後私は、最初の講義の際に一度、星野さんのことを簡単に紹介しておき、第2講目以降は、原則的にそれ以上の説明はしません。

「もし皆さんが疲れたら、或いは授業がキツかったら、眠るのもいいですが、出来ればしばらく、星野さんと向き合っていなさい」

星野さんの絵画と詩は素晴らしいもので、たとえ小さな黒白のコピーでも、一分間目を向けていさえすれば、そこにあるメッセージは十二分に伝わってくるのです。

★ご存知のように星野さんは大学卒業後、或る中学校に体育教師として赴任した直後、模範試技の最中に首の骨を折ってしまい、半身不随の身になってしまいました。この状況自体は、半世紀近く経った今でも変わりません。手も足も動かせず、自死さえ叶わぬ身体。地獄の苦しみの中で、お母さんを始めとするご家族の愛に支えられ、やがて星野さんが始めたこととは、お見舞いに頂いた草花の素晴らしさをスケッチし、それに言葉を添え、感謝と生きる証しとすることでした。お母さんに絵筆を口にくわえさせて貰い、絵の具を溶いて貰い、少しずつ少しずつ、星野さんは目の前の草花の美を映し取っていったのです。やがて現われ出たのは、今我々が目にするあの素晴らしい詩画の世界でした。著作権上からも、ここに絵画を掲載することは出来ませんから、その詩を三つだけ「引用」の形で、紹介させていただきます。

なのはな（1975）

私の首のように
 茎が簡単に折れてしまった
 しかし菜の花はそこから芽を出し
 花を咲かせた
 私もこの花と
 同じ水を飲んでいる
 同じ光を受けている
 強い茎になろう

れんぎょう（1976）

わたしは傷を持っている
 でもその傷のところから
 あなたのやさしさがしみてくる

ぺんぺんぐさ（1979）

神様がたった一度だけ
 この腕を動かして下さるとしたら
 母の肩をたたかせてもらおう
 風に揺れるぺんぺん草の
 実を見ていたら
 そんな日が本当に
 来るような気がした

（新編）『四季抄 風の旅』（星野富弘、学研パブリッシング、2012）

★面接試験の場で二人は、星野さんの詩画を目にした時、思わず心の内で「アッ！」と叫んだのでした。この叫びの中に、辛い受験生活への終わりを告げる幸運を直観した喜びがあったことは否定出来ないでしょう。しかし二人がこの叫びを報告してくれたこと自体、そして浪人時代に星野さんの世界に触れた感動を伝えようと、遠路はるばる私を訪ねて来てくれたこと自体、既に彼らが心の優しい人間であることを十二分に物語っているのです。星野さんの「傷」を通して沁みてきた「やさしさ」とは何であったのかを知り、その「やさしさ」を以って苦しむ人たちの傍らに寄り添う医師となり得るのは、M君やN君のような若者でしょう。（この項 了）

— ひ と み 日土水君の「靴屋」の哲学 —

今回は「日土水」君について紹介したいのですが、まずこれがA君の「名前」であることから説明する必要があるでしょう。彼は「日土水」、つまり「ひ・と・み」という名で、彼のお父さんがつけて下さったものです。ここに紹介する人たちは、原則的にその姓か名をイニシャルで記しているのですが、A君の場合は「日・土・水」という名前そのものを紹介したいので、例外とさせて貰います。

★様々な名前に触れてきた私ですが、初めて「日土水」という名前を知った時は、新鮮な驚きを禁じ得ませんでした。更に日土水君が哲学志望であると聞かされた時、私は咄嗟にギリシャ哲学のタレースを思い、名前が導く「天職」があるのかと、またも驚きを禁じ得ませんでした。驚きと感動の連続、それが日土水君との付き合いです。

★日土水君が進学したのは、京都の或る私立大学でした。私は彼が、古都の落ち着いた環境の中で、さぞ充実した思索生活を送っているのだらうと想像していました。ところが数年後に帰京した彼は、なんと卒業後は靴職人になると言うのです。またも驚かされました。動機は、如何にも日土水君らしいものでした。

★京都から離れ、或る田舎を旅していた時のことだそうです。通りかかった靴屋さんをふと覗いて、そこに置かれた一足の靴に目が留まった時、突然彼の心にその靴の美が飛び込んで来たと言うのです。

「この美とは何なのか？」

「この美を追いかけ、その本質を知ることこそ、自分が求めようとしている哲学ではないのか？！」

★それから何年かが経って、私の許を訪ねてくれた日土水君は、またも私を驚かせ、感動させたのでした。靴職人としての修業を続ける中で、彼は新たに「義足」作りにも乗り出したと言うのです。周知の如く、世界中で繰り広げられる戦争や内戦の後に残されるのは、恐るべき数の地雷です。正に今この瞬間にも、子供たちを始めとして数多くの罪なき人たちの命が奪われ、足が吹き飛ばされ、この人たちは生涯

にわたる苦しみを負わされるのです。日土水君は、この人たちがもう一度自分の足で立ち、そして大地を踏みしめて歩けるような「義足」を作ろうと心に決めたのでした。

★「義」という言葉は「義足」に用いられる場合、「実物の代用をするもの」という意味を表わします（『広辞苑』岩波書店）。しかし「義」の本来の意味は「道理。条理。物事の理にかなったこと。人間の行うべきすじみち」、更には「利害をすてて条理にしたがい、人道のためにつくすこと」とされます（同上）。日土水君が選び取った「義足」作りの道とは、哲学を学ぶ青年が選び取る、およそ考え得る限りで最も常識からは遠い、しかし何よりも「理にかなった」道だと言えるのではないのでしょうか。

★「真理」を探究する哲学から、靴の「美」の追及へ。更に足を失い、人生を失いかけた人たちのための新たな足、「義・足」の制作へ——「真理」と「美」と「義」。ここには今まで日土水君が歩いて来た青春と、その哲学的思索の足跡の全てがこの上なく平明かつ見事に刻まれているように思われます。彼は「哲学」というものが、ただ単に形而上学的・抽象的思弁の業ではなく、この現実世界で具体的な生を持ち、「哲学」する人間を、「利害をすてて条理にしたがい、人道のためにつくす」という倫理的行為にまで行き着かせるものであることを、見事に示してくれたのです。

★先日の便りでは、友人と立ち上げた小さな靴工房は15年が経ちましたが、少なからぬ苦労が続くようです。しかし彼は決して愚痴をこぼしません。自らの未熟さを見つめ、絶えず努力を続け、家族を大切にする日土水君。彼が製作した靴を、そして義足を履ける人は何と幸せなことでしょう。普段は量販店の靴しか履かない無粋な私も、人生の最後の一步、そして死を超えた「永遠の生命」への第一歩は、日土水君に作って貰った靴で、明るく晴れ晴れと踏み出させて貰おうと思っています。

★「靴職人」ということでは、ここで「ヤコブ・ベーム」（神祕主義思想家、1575-1624）を紹介しておきたいと思います。16世紀から17世紀にかけてのドイツ、戦乱と病に満ちた悲惨な時代を生きた人ですが、1600年ベームは、太陽の光によって錫の容器が突然輝き出すのを見て「一切」を悟り、その神秘体験を長い時間をかけて考察した末に、『黎明』^{アウローラ}（1612）という一冊の本に結晶させます。しかし当時の宗教界は彼を異端者と見なし、死に至るまで迫害を続けたのでした。

生涯を靴職人として通したベームは、ヘーゲルを始め

として祖国ドイツばかりか、ロシアを含む西欧の哲学・宗教・芸術に、また京大哲学科の西田幾多郎や西谷啓治を始めとして、日本の哲学・思想界にも測り知れない影響を及ぼし続けています。

私はこのベームについて、友人の岡部雄三君と、その師南原実先生に実に多くのことを教えて頂きました。岡部君も南原先生も、ベームと共にドストエフスキイをこよなく愛していました。今は亡きお二人の学恩に報いるためにも、ベームとドストエフスキイ、両者の宗教思想の素晴らしさとその響き合い、殊に二人が成し遂げた聖書解釈の独自性を少しでも明らかにし、将来の若者たちの思索のために、何らかの指針を残しておきたいと思っています。

日土水君がベームと同じ「靴職人」となったこと、私はこのことに実に不思議な縁を感じています。岡部君と南原先生も、日土水君のことを知ったならば、さぞ喜んだことでしょうが、残念ながらその機会はありませんでした。しかしお二人は、日土水君と私との間に、きっと新しい「何か」をもたらしてくれることでしょう。

(この項 了)

予備校 graffiti ②①

— 「刀剣修業」の道に入ったM君 —

★M君は大学時代を通じて、ドストエフスキ研究会に勤勉に出席し続けました。

自らも言うように、彼の認識のパターンとは、対象を直ちにズバリ捉えるというよりは、ゆっくりとゆっくりと噛み砕いてゆき、着実に自分のものとしてゆくところに特徴があります。禅宗の世界で言う「頓悟」の人と言うよりは、正に「漸悟」の型に属するのだと思います。ドストエフスキとの取り組みにおいても、M君は或る一つの問題を理解するために相当の時間を必要とするのでした。しかし一度理解してしまうと、それは確実に彼の血となり肉となり、次の問題を考えるための動かぬ土台となっているのです。本人は「僕、鈍いですから」と言うのですが、その思考のプロセスを傍らから見ていて私は、この青年が将来ドストエフスキ世界と聖書世界とをどのように組み立ててゆくのか、非常に興味を抱かされるのでした。大学での勉強も恐らくはこの型で着実に身につけていったのでしょう。自らを「鈍い」と言うM君は、最終的には所属する学部で首席の座を獲得してしまいました。

★このM君が大学を卒業するや選んだのは、なんと「刀剣修行」の道でした。彼のお父さんがこの道の先達で、高名な刀剣師であることは私も知っていました。しかしM君自身からは、この道に入るとは聞かされていなかったため、最初は少なからず驚かされました。しかし間もなく私は、この決断が如何にもM君らしいものだと思うに至りました。今までのドストエフスキ研究会での姿を思い合わせてみても、「刀剣」の道でじっくり、ゆっくりと修業を積むM君、長い時間をかけて鋼鉄を鍛え上げる彼の姿は、何ら奇異なものを感じさせないのです。むしろここには極めて自然なものがあり、私は彼が新しい「何か」を創り上げるだろうことを確信しました。

★間もなく偶然、我々は東京駅で出会いました。M君は、お父さんから紹介された師の下で修業をするため、関西に出発するところだったのです。「ドストエフスキを読む刀剣師となって、素晴らしい作品を創るんだぞ!」。彼と別れの握手を交わしながら、私はこう励ましたのを覚えています。

★ところがその後間もなくのこと、恐らく半年も経たない内だったと思います。M君から「家に帰った」との知らせが来ました。彼は「師」が要求し期待する「弟子」

ではなかったようです。ドストエフスキイ研究会の四年間で私が見た彼の姿、つまり対象をじっくり、ゆっくりと自分のものとしてゆく彼独自のペースは、「師」の要求するペースではなかったのだろう、私はこのように推察をしたのでした。

新たに、お父さんを「師」とするM君の修業が始まりました。それから十年以上が経ちます。時おり寄せられる便りからは、お父さんの下でゆっくり、着実に修業を積むM君の姿が目に見えてきます。

★一人の人間が一人前になることは容易なことではなく、そのために必要とされる時間と苦労は並大抵のものではありません。M君はその大変な「修業」を、我々の目の前でごく自然に行証してくれているように思われます。自らを「鈍い」とまで言う彼独自のゆっくりとした学びのペースや、彼がその下での「修業」に赴いた「師」との関係など、プライバシーに属することも敢えて記し、ここに日土水君と共にM君を紹介したのは、たっぷりと時間をかけて「修業」を積むこと、このことから「職人」になるという道が我々には存在すること、あらゆることが定式化・マニュアル化され、「促成栽培」がもてはやされる現代社会において、実はこれは最先端をゆく自己完成への道の一つであり、試行錯誤に値する、困難ではあれ魅力的な選択肢であることを知って頂くためです。

★私は以前『ゴルゴタへの道』という本で、親鸞について論じた際、鎌倉時代に時代の前面に登場した武士たちと親鸞に関して、次のように記しました。

「刀剣を以って人を殺し民衆を統治することを専門とする武家集団が政治の表舞台に躍り出た鎌倉時代、武士たちがかざす刀剣の刃と拮抗し、それをも凌ぐ鋭利さと強さを秘めたもう一つの刃がこの時代生まれたとするならば、それは親鸞が指し示した彌陀の誓願への途、「はづべしいたむべし」の自覚によって深められ鍛えられた、永遠を見つめる心眼まなざしとその閃きに他なるまい」 (『ゴルゴタへの道』新教出版社、2011)

次回の「予備校 graffiti ㉓」にも記しますが、私には暴力というものをどうしても容認出来ません。しかし絶対非暴力の立場を貫くことで、恐るべき暴力に満ち溢れるこの現実世界の問題を何処まで解けるのか？——ある意味で、暴力の精髓とも言うべき「刀剣」作りに生涯を賭けるM君は、この問題についてどう考えるのか、私は何時の日か彼とじっくり話をしてみたいと思っています。決して彼を困らせようとか、議論のための議論を吹っ掛けようとかいうのではありません。長い大変な修業の末に「刀剣」の本質に誰よりも近づき、その「光と闇」を知るに至るであろうM君こそ、「刀剣」について、そして「刀剣を超えるもの」について語り得る、真の力と智慧とを兼ね備えた人物となるだろうと信じるからです。 (この項 了)

予備校 graffiti・余録 ④

★中世ヨーロッパの修道院の門口には、次のような言葉が刻まれていたそうです。

MEMENT MORI (メメント モリ) 「死を忘る勿れ」

この言葉は中世の修道僧たちばかりか、ここに紹介した若者たちの胸にも強く刻み込まれていると言えるでしょう。海外で il-literacy の問題と取り組み続ける E 君。救急医療の S 君。アフリカの子供たちの受難を前にして、医学を志すに至った F 君。友人二人の余りにも早過ぎる死を胸に刻む Y さん。そして「義足」作りと取り組む日土水君 —— 彼らは皆「死」との直面によって、否むしろ「死」からの呼びかけに応じて、自らの「生」を大きく変えた若者たちです。彼ら以外にも、人生の「誤魔化し」を断ち切ることを決意した G さんや、予備校で星野富弘さんの詩画と出会った M 君と N 君もまた、やがて医師としての仕事を進める中で、人間の「死」の問題との直面を迫られてゆくでしょう。「死」を忘れず、「死」を超えた「永遠の生命」を求めること —— この MEMENT MORI という言葉を、今回の全体を貫くテーマとして、また我々人間全てが胸に刻むべき言葉として、改めて自覚をしたいと思います。

★この MEMENT MORI の問題を誤魔化さず、それと生涯正面から向き合い続けたのがドストエフスキイと言えるでしょう（「ドストエフスキイの肖像画・肖像写真⑦」を参照）。このことを何よりも明瞭に示すのは、『カラマーゾフの兄弟』において、イワンが弟のアリョーシャに語る次のような言葉です。

「俺もお前と同じロシアの小僧っ子だ。[中略] そういう連中が、飲み屋でわずかな時間を捉えて何を論じると思う？ 他でもない、神はあるかどうか、不死は存在するかどうかという世界的な問題なのだ」（『カラマーゾフの兄弟』第五篇第3章）

『カラマーゾフの兄弟』のテーマとは何であることを説明する時、私は必ずこの言葉を挙げることにしています。「神はあるか」「不死は存在するか」—— これらの問いに対して、ドストエフスキイが如何なる思索を展開し、如何なる答えを出すに至ったのか。これに関して私は、救急治療医の S 君の詩「傷ついた野花のように」を紹介した際に、『カラマーゾフの兄弟』のゾシマ長老の思想を紹介しました。ゾシマによれば、我々人間の一人一人が、万人万物一切に対して罪があることを自覚した時、我々は神とキリストの愛に触れ、「愛によって全世界を獲得し、世界の罪を自身の涙で洗い浄めることが可能となる」。そこに開けるのが、死を超えた「永遠の生命」である —— このゾシマの思想こそ、イワンの提示した問題について、ドストエフスキイの思索が究極行き着いた結論だと言えるでしょう。この説明だけでは抽象的で捉え難いと思われる方は、是非『カラマーゾフの兄弟』と取り組み、ゾシマ長老と向き合ってください。Y さんも今、このゾシマ長老と向き合っています。ドストエフスキイ研究会も、ある意味で、このゾシマ長老の言葉と思想の解明に向けて、またゾシマを師とする「実行的な愛」の人アリョーシャの理解に向けて、三十余年間作業を続けてきたと言えるでしょう。

★今回は医学部関係の人たちが多く登場しました。その人たちの中でも、一度社会人となった後に医学部への再受験を試みたGさんとF君の場合は、多くの人たちの参考となるのではないのでしょうか。人生の途上で、我々が新たな冒険に乗り出すのは至難の業です。「生活があるから」「別の仕事には簡単に移れないから」「年齢が許さないから」「夢ばかりでは生きられないから」「自分には才能などないから」・・・ 様々な理由が我々を「壁」の前に引き留め、「現実主義者」にさせ、そして結局は人生の根本問題とは遠い所で暮らす「小市民」に仕立て上げてしまうのです。

医学の道は様々な点で大変です。名誉欲や金銭欲や権力欲に絡め取られてしまう場合も少なくありません。しかし人間の「生と死」の問題の重さに目覚めた人は、医学の道に進むことを人生の選択肢の一つとするのもよいと思います。人間の「生と死」が日々刻々と劇的に展開する場で、医療知識と技術をギリギリにまで研ぎ澄ませつつ、真剣勝負の判断と行動、そして思索を迫られる場が医療の現場です。この場をただ偏差値の高さを誇るだけの人たちや、富と地位に恵まれた富裕層の子弟の独占物とはせず、「志」を持った人たちが、「職人」として広く活躍する場にして欲しいと思います。

★日本国内で「先生」として崇められ、とかく「小成」に甘んじてしまう医師たちが多いのに対して、^{ドクター}眼と心を大きく開き、海外での医療活動に従事する典型的な「医師」として、アフガニスタンのペシャワールで長い間医療活動を続けてこられた中村哲さん^{ドクター}を、ここに紹介させて頂きたいと思います。先生は河合塾にもしばしば「エンリッチ講座」のために来て下さっていて、その講演の一つが河合文化教育研究所から出版されています（『ペシャワールからの報告』河合ブックレット、1990）。西洋社会と日本が如何に暴力的で醜悪な文明化・近代化を押し進めてきたか、そのしわ寄せが如何なる悲劇をアフガニスタンにもたらしたか。また医師とはそもそも如何にあるべきか —— これらのことが、この小冊子には鋭く的確に語り尽くされています。医師志望の人も、そうでない人も、人間と世界と歴史を知るために、是非一読をお勧めします。

ところで中村先生によれば、先生の許を訪ねて感激し、自分も医師になった暁にはペシャワールに戻って来ますと誓って帰った医学生の中で、実際に日本を離れてアフガニスタンに来てくれた人はまず殆どいないのだそうです。ここからも、日本の医療の現実が垣間見られます。

★最後になりますが、今回私の心を強く引きつけたのは、M君と日土水くんが歩む「職人」への道でした。改めて振り返ると、今まで私がこの「予備校 graffiti」に紹介してきた人たちの多くは、旧い自分を捨て、新しい目的と課題に向けて困難な勉強を開始した「修業者」、或いは「求道者」であることを基準として選んだように思います。今回紹介したM君と日土水君の二人もまた、その道の先達たる「師」の下に弟子入りをし、そこでの長く辛い「修業」の道に敢えて踏み入った若者だという点で、上の「修行者」を更に突き詰めたケースだとも言えるでしょう。『カラマーズフの兄弟』においても、末弟のアリョーシャはイエスの呼び声に応えるべく、高等中学校を中退してモスクワを去り、故郷にある修道院でゾシマ長老と出会い、その下に弟子入りをします。現代社会における「修業」や「求道」や「出家」の問題、「職人」の問題、「師」と「弟子」の問題 —— これらは「ロシアの小僧っ子」ばかりか、人間である限り誰もが一度は真剣に考えるべき問題でしょう。（この項、了）

予備校 graffiti・もう一つの「青春」 ④

小出次雄画



〔前回と同じく今回のデッサンもまた、恐らく1930年代、小出先生三十歳代の作品と推測されますが、創作の正確な日付は不明です。ここにも今までの三作とは違った形で、激しく鋭い青春の相貌が抉り取られているのではないのでしょうか。〕